

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770095

研究課題名(和文) 1920-30年代における「文学の価値化」と「価値哲学」の理論的関係の研究

研究課題名(英文) Theoretical relationship between "Commercialization of Literature" and "Axiology" from 1920s to 30s

研究代表者

位田 将司 (INDEN, Masashi)

日本大学・経済学部・助教

研究者番号：80581800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代から30年代にかけて「文学の価値化」、つまり「円本」をはじめとする商品化が進むのであるが、この要因は出版メディアの発展と読者の大衆化にだけ求められるものではなく、当時日本でも隆盛を誇った、新カント派の「価値哲学」の影響を考慮に入れなければならないことが判明した。「価値哲学」は当時の多くの文学者たちに強い影響を与えており、その理論とは「文化」の中に「価値」の構造を見出すというものであった。文学者たちはその「価値哲学」の理論の中に文学の商品化の理論的な可能性を見出したのである。

研究成果の概要(英文)："Commercialization of Literature", for example "enpon," has progressed from 1920s to 30s in Japan. This phenomenon should not seek the cause only to the publication media of the development and the masses of readers, but also to the influence of the "Axiology" of neo-Kantian philosophy was flourishing at the time in Japan. "Axiology" gave a strong influence on many of literary persons. These literary persons, in the theory of "Axiology", found the possibility of "Commercialization of Literature."

研究分野：日本文学

キーワード：日本近代文学 横光利一 価値哲学 新カント派 リッケルト 芸術的価値論争 資本論 円本

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1920年代後半から30年代にかけて、日本文学の商品化が、例えば改造社の「円本」などの形で進んでいた。当時の有力な文学関連の出版社である改造社や文芸春秋などの経営方針によって、女性読者の開拓などがおこなわれた。また「サラリーマン」の出現によって、文学を消費する階級が形成されたことが、文学を商品として消費する人口を急速に増加させる原因ともなった。出版社はこのような読者人口の増加と文学の大衆化に対して、経営・編集方針を寄り添わせることで、これまでにない大量の読者を獲得するようになったのだ。そして、この文学を消費する階級の形成こそが、文学の商品化を促していたのだ。出版メディアの経営・編集戦略と、読者人口の急速な増加によって、文学は資本化され、そして商品となっていたのである。

(2) このような1920年代から30年代にかけての、出版メディアの発展と「サラリーマン」や女性読者の増加による文学の大衆化、文学の商品化は、出版メディアと雑誌への調査や、実証的な研究によって詳細に分析されてきた。例えば、小説家の横光利一は、文芸春秋の菊池寛と改造社の山本実彦と、人的及び資本的な関係を深めていき、文学の商品化に沿う形で創作をおこなっていたことも判明している。横光は改造社や文芸春秋のような出版メディアの戦略に、自らの創作スタイルを適応させていったといえるだろう。ただし、ここで問題なのは、出版社を含めた出版メディアの発展と、読者の大衆化という、メディア環境の変化だけで、文学の商品化の要因を分析可能なのかということである。何故ならば、たとえこのようにメディア環境に変化があったとしても、その環境をすべての文学者や出版関係者が、享受可能なほどに認識したわけではないからだ。つまり、そのようなメディア環境の変化を認識するための「理論」が必要だったということである。同じように、そのメディア環境も自然に発展し構築されたわけではなく、なんらかの「理論」が、そのメディア環境の構築に影響を与えていたと考える必要がある。1920年代から30年代にかけての読者の大衆化、文学の商品化は実証的な調査や研究の側面では進展してきたが、「理論」の側面はまだほぼ解明されていないといえてよい。

## 2. 研究の目的

(1) 1920年代から30年代にかけての文学の商品化は実証的な調査や研究は詳細になされてきているが、「理論」の側面ではほとんど解明されていないといえる。そこでメディア環境の実証的な調査・研究を理論的に基礎づける必要があると考えた。本研究が目したのは、1920年代から30年代の日本において隆盛を誇っていた、新カント派の哲学であ

る。そして、その新カント派の哲学の中でも、西南ドイツ学派のハインリヒ・リッケルトを中心とした「価値哲学」が、文学の商品化を理論的な側面から押し進めたのではないかという仮説を立てることとなった。「価値哲学」とは「文化」を「価値体系」の構造に還元することで、「文化」を「価値」や「文化財」として認識する理論である。当時、自然科学に較べ文学などの「文化」には、普遍性が乏しいとされていた。そこでリッケルトは「文化」に「価値関係」の構造を見出すことで、「文化」もまた、自然科学と同じように、普遍的な「価値」を有するというを証明したのだ。「価値哲学」は、自然科学と対比される文化的な事象を、普遍的な学へと高めようとしたといえよう。このようなリッケルトの「価値哲学」を、文学が「商品」という経済的な「価値」へと還元される理論として解明しようとしたのである。

(2) この「価値哲学」は、どのような形で日本文学に影響を与えていたのかを解明する必要があった。そこで横光利一を出発点として、横光に影響を与えた京都学派の哲学者たち、そして横光と理論的に激しく争ったマルキシズム文学者たちから、「価値哲学」の日本文学への影響を探ることとした。横光は新感覚派時代に「形式主義」を、評論「新感覚論」(1925)によって基礎づけているのであるが、この評論は新カント派の影響が大きいことが分かっている。そして、この横光に理論的な影響を与えた、由良哲次と三木清はともにドイツで新カント派の哲学を学んだ哲学者であった。特に、1930年代に横光と理論的に交流する三木は直接リッケルトに師事し「価値哲学」を研究している。そして、横光と激しく論争したマルキシズム文学もまた、実はリッケルトの「価値哲学」をマルキシズム文学の「価値」を基礎づけるための理論として、マルクス経済学と並行する形で援用していたのだ。先行研究では、横光の新カント派の受容、京都学派による新カント派の日本文学への影響、そしてマルキシズム文学への「価値哲学」の影響は、個別の文学史的事象として考えられてきた。しかし、この「価値哲学」の日本文学の影響を、文学の商品化の理論的基礎付けとして考えることで、1920年代から30年代にかけての、文学が「商品」として価値化していく文脈の中へ、新カント派の「認識論」と「価値哲学」を据えることが可能になると考えられる。この時代における「価値哲学」の影響は、個別の文学的事象の中で理解するのではなく、文学の商品化という文脈の中で結び合わさなければならないのである。また、マルキシズム文学は、なぜマルクス経済学という経済的な価値理論を持ちながら、「価値哲学」にも依拠したのかを明らかにする必要があった。これによって「価値哲学」とマルクス経済学という二つの価値理論が、いかなる関係で日本文学に

において結びついたのかを、解明しようとした。

### 3. 研究の方法

(1) まずは、横光利一のテキストを精読し精査することで、そこに「価値哲学」の影響がどのように反映されているかを調査した。前掲「新感覚論」には新カント派の影響があると述べたが、「マルキシズム文学の展開」(1929)には「作品価値」という言葉が頻出している。「形式とメカニズムについて」(1929)でも「作品価値」の決定が「形式主義」の最大の目的といわれている。この他、リッケルトの『文化科学と自然科学』(1922)の内容をほぼ踏襲した記述のある評論も書いており、横光の1920年後半から30年代にかけてのテキストには、新カント派の「価値哲学」の影響が色濃く反映されていることを、当時出版されていた新カント派の書籍と、横光のテキストの内容を突き合わせることで明らかにした。

(2) 京都学派の哲学が由良や三木を通じて横光に影響を与えているという手ごかりから、京都学派のテキストを調査精読することで、同時代の日本文学に京都学派のあたえた理論的な影響の程度を調査した。特に三木清は「価値哲学」に関するテキストを数多く発表している。興味深いことに、1928年前後にマルキシズム文学を中心とした「芸術的価値論争」と呼ばれる論争に三木も関わっている。この論争は平林初之輔を中心として、まさに「価値哲学」をそのまま援用することでおこなわれている。この論争に京都学派で、しかも「価値哲学」をリッケルトから直接教えられた三木が関わっているのは重要だといえる。京都学派は新カント派の影響を強く受けているが、その中でも特に三木のテキストとこの論争のテキストを突き合わせることで、日本文学への「価値哲学」の影響関係を詳細に調べることができる。そして、それによって三木の横光への理論的影響も、「価値哲学」の側面からさらに詳細に調査することができるようになる。

(3) 「価値哲学」がどのようにマルキシズム文学に影響を与えたかを調査するため、平林初之輔のテキストを中心に、「価値哲学」との関係性を調査することにした。平林はマルキシズム文学者ではあるが、強くリッケルトの影響を受けていることはわかっている。そこで、平林の「価値哲学」に関わるテキストを調査することになった。また、平林を中心に、先にも述べた「芸術的価値論争」がおこっているため、論争に関わった文学者のテキストを調査し、そのテキストが「価値哲学」をめぐるどのようなやり取りをしているのかを、実証的に分析を試みた。また、それから派生する形で、なぜマルキシズム文学者たちがマルクス経

済学を文学的な基礎としながら、「価値哲学」にも理論的な基礎を求めたかの問題を解決するために、当時出版されていた、『資本論』の精読と、その経済学理論と「価値哲学」の理論的な親和性を分析した。平林はマルクス経済学と「価値哲学」を援用したテキストの中で、文学の「商品化」について論じているので、それらのテキストを調査し精読することで、マルキシズム文学者側からの、文学の商品化と価値化の過程を明らかにしよう試みたのである。

### 4. 研究成果

(1) 本研究により、横光利一の新カント派受容が、これまでより詳細に分析することができ、なぜ横光が標榜した形式主義文学がカント哲学を必要し、それがどのようにして文学の「価値」を決定していたかを解明することができた。新カント派の哲学は、カント哲学に現れる「感性」と「悟性」、すなわち感覚する能力と思考する能力という異なった認識能力を、どのように人間の主観の中で統一することができるのかという問題に取り組んでいた。なぜ人間の主観は、特殊な能力と普遍的な能力を同居させて認識を構成しているのか。「価値哲学」はその根拠を「価値」に置いたのだ。人間の主観性は文化の「価値」という形で統一される。人間の認識は文化の中で「価値」として統一されていると、リッケルトは考えたのである。ということは、文化的な構築物である文学テキストもまた、人間の主観を「価値」によって統一することができるということになる。横光が形式主義文学を基礎づけようとして発表した1930年代のテキストに「価値」や「作品価値」という言葉を頻出させるのも、この「価値哲学」から考える必要があったのだ。横光は、「価値哲学」を援用することで、文学が文化財として「価値」のあるものとして存在するということを、理論的に証明しようとした。だからこそ横光は、文学の「価値」に注目することができ、そこから派生する形で、この「価値」を「商品」の「価値」へと敷衍して考えることができるようになったといえる。横光が文芸春秋や改造社と関係を深めていき、文学の商品性を強く意識した背景には、このような新カント派の「価値哲学」という理論的な背景があったと考えるべきなのである。本研究の調査によって、横光のいくつかの評論が「価値哲学」の強い影響を受けて書かれていることがわかった。横光が、早い時期から文学の商品化に興味を持つことができたのは、もちろんメディア環境の影響もあるが、「価値哲学」によって、自らの形式主義という立場を構築していたからなのだ。文学という文化的事象を、「価値」という「形式」によって認識することを可能にする理論に触れていればこそ、横光は文学の商品化へという思考を持つことができたのだ。そして、この文学の商品化という思考は、横光の場合、

マルクス経済学の「商品」の理論と重なり合っていくということも調査することができた。この調査結果は、論文「横光利一と『資本論』『上海』と『機械』を連関させる「経済学」」(『早稲田現代文芸研究』4号、2014年)で広く公表した。横光の「価値哲学」の受容は、新カント派経由のカント哲学の摂取のみにとどまらず、マルクス経済学の「商品」の分析理論とも関わることで新たに判明したのである。ここにはマルクス経済学の「商品」の理論とカントの認識論には共通点が存在するのだ。

(2) 横光の「価値哲学」の受容が、マルクス経済学へとつながっていくという分析は、マルキシズム文学がなぜ「価値哲学」に接近していたかの重要なヒントになった。横光は「価値哲学」からマルクス経済学へ、マルキシズム文学はその逆を、つまり理論的に交差している。この解明は重要で、これまで横光とマルキシズム文学は激しいその論争から、理論を異にする文学的立場をとると考えられてきたが、実際は理論的にはほぼ同じ影響の下、同じく文学の「価値」と商品化について思考していたことになるのだ。1928年前後にマルキシズム文学を中心にした「芸術的価値論争」が始まる。平林初之輔を始めとしたマルキシズム文学者たちが、文学の「価値」の基礎付けをおこなおうとするのだが、その論争は、ほとんどリッケルトの「価値哲学」をなぞる形でおこなわれているのがわかる。だからこそ、その論争に横光もまた参入できたわけである。横光とマルキシズム文学は、文学の「価値」を考察する際、実は同じ「価値哲学」を理論的基礎にしていたのである。なぜ横光と平林らのマルキシズム文学者たちは、論争することができたのかという疑問は、この「価値哲学」の共有ということが解明された今、理論的に説明可能となった。では、なぜ「価値哲学」がマルクス経済学の「商品」の理論と結びついたのか。前述したように、カントの認識論は「感性」と「悟性」の総合の理論であった。そして『資本論』で説明されるように、「商品」は「使用価値」と「交換価値」によって構成されたものである。マルクスは「使用価値」を「感性」に、「交換価値」を「悟性」に割り当てている。ということは、マルクスの「商品」の分析は、カントの認識論を援用してなされたものだったのだ。だからカントの認識論を基にした「価値哲学」は、マルクスの「商品」の価値理論と理論的に結びつきやすくなるのである。横光とマルキシズム文学が、「価値哲学」とマルクス経済学を同時に共有できた理論的な根拠がここに解明できた。これは「芸術価値論争」と呼ばれる論争に関わるテキストを精読し、リッケルトとマルクスの理論とに突き合わせることで判明した、本研究の重要な成果である。この解明によって、カントというマルキシズム文学者から見ればブルジ

ョワ哲学と見做されていた理論が、実はこの時期融合する可能性を秘めていたということが明らかになったと言えよう。しかもそれが文学の「価値化」、「商品化」という問題点で重なり合っていたということが理解することができるようになった。この研究成果によって、「価値哲学」とマルクス経済学の価値理論を関係づけながら、日本文学の商品化の理論的な根拠を更に調査することができるようになったのである。横光も平林も文学を「商品」と見做せたのは、このような理論的な側面から見れば当然だったといえる。この研究成果は、前掲論文『横光利一と『資本論』『上海』と『機械』を連関させる「経済学」』と、学会発表「横光利一における「文字」という「商品」」(日本大学国文学会、2013年6月29日)によって公表した。横光が文学を構成する「文字」のレベルにまで遡行して、その商品性を考えていたことを明らかにし、同時に平林らマルキシズム文学者も「商品」として文学を見なすための理論を構築していたということも、実証的にテキストとして示した。

(3) この「価値哲学」の調査の過程で、マルクス経済学以外で、例えば新カント派の経済学者である左右田喜一郎のような非マルクス経済学者も、経済学とカントの認識論を理論的に接合しようとしていたことが視野に入ってきた。このように同時代の経済学や価値理論のさらなる調査の必要性があるだろう。単著『「感覚」と「存在」：横光利一をめぐる「根拠」への問い』(明治書院、2014年)において、その必要性に触れ、これまでの新カント派の研究成果も掲載し、公表している。そのほか、論文「横光利一『夜の靴』に内在する『欧洲紀行』の「痕跡」について」(『研究紀要』2015年)を発表することができた。そして学会発表「二つの爆発 岡本太郎と横光利一」(昭和文学会、2014年6月14日)において、カントの認識論が、横光と同時代で親交のあった、岡本太郎とも共有するものであったということを発表で示した。これによって横光のカントの認識論の影響がかなり広いものであることが判明している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 位田将司、横光利一『夜の靴』に内在する『欧洲紀行』の「痕跡」について、研究紀要、査読無、77号、2015年、pp.1-15

(2) 位田将司、横光利一と『資本論』『上海』と『機械』を連関させる「経済学」、早稲田現代文芸研究、査読有、4号、2014年、pp.89-114

〔学会発表〕(計2件)

(1) 位田将司、二つの爆発 岡本太郎と横光利一、昭和文学会、2014年6月14日、日本大学商学部(東京都・世田谷区)

(2) 位田将司、横光利一における「文字」という「商品」、日本大学国文学会、2013年6月29日、日本大学文理学部(東京都・世田谷区)

〔図書〕(計1件)

(1) 位田将司、明治書院、2014年4月10日、総325頁、「感覚」と「存在」：横光利一をめぐる「根拠」への問い

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

位田 将司 (INDEN, Masashi)

日本大学・経済学部・助教

研究者番号：80581800